

スタートアップの先進技術とサービス例

相続時のデジタル遺産の引き継ぎを容易にするパスワード管理ツールや、AIが能動的に提案する金融アドバイザーアプリなど、先進的なデジタル技術を活用したスタートアップのサービスが次々に登場している。フィンテックや量子コンピューターの分野でスタートアップが果たしている役割について、サービス事例とともに紹介する。

金子 雄介

先端技術ラボ
シニアエキスパート

フィンテックサービスに用いられる 先進技術

(1) パスワード管理ツールを利用した「デジタル遺産 の引き継ぎ」

高齢者のスマートフォン所有率は9割近くに達している。また、スマートフォンには30～50個のIDやアカウントを登録しているという調査もある。こうしたなか、相続時に家族がスマートフォンに残された情報にアクセスできず、資産や契約の情報を把握することが難しくなる「デジタル遺産」問題が、社会課題として顕在化しつつある。

その解決ツールの1つとして挙げられるのがパスワードマネージャーだ。これは、デジタル遺産の引き継ぎと日常のセキュリティを両立するもので、主な機能は2つ。第1は情報の引き継ぎである。普段は本人のみがアクセスできる状態を保ちつつ、万が一の際には、家族などあらかじめ指定した別のユーザーに情報を引き継ぐことができる。第2は日常のパスワード管理の自動化である。強固なパスワードの生成や保存、管理を行い、ユーザーは安全に自動入力できる。

例えば、サニーズ（本社：東京都）が提供するパスワード管理ツール「Privaco（プライバコ）」は、ゼロ知識アーキテクチャを採用したグローバル基準の暗号化技術に加え、マイナンバーカード（デジタル認証アプリ）を利用した認証など、国産サービスならではの特徴を持っている。Privacoは、フィンテックイベント

「FIN/SUM 2026」のスタートアップコンテストで最優秀賞（日経賞）を受賞した。

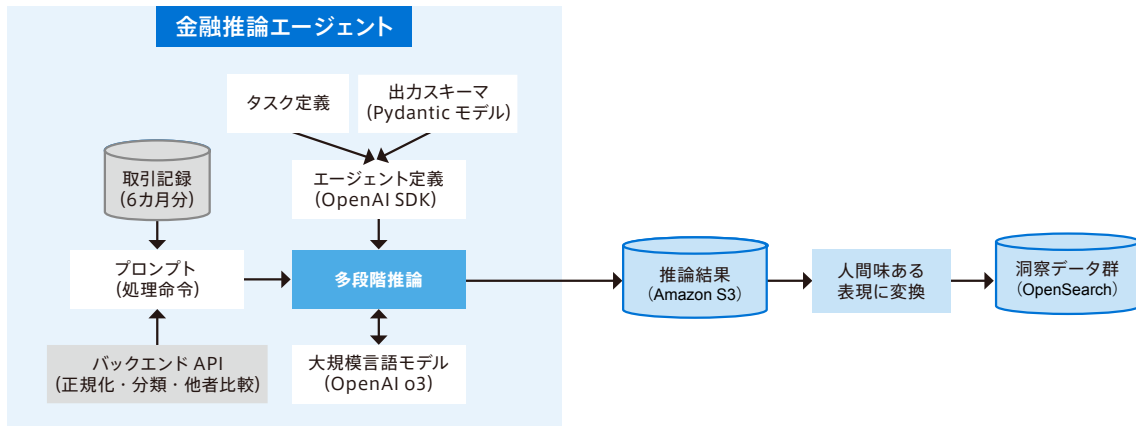
(2) 相談しやすいAIファイナンシャルアドバイザー

個人向けの資産管理アプリケーションは、最も身近で導入しやすい金融アプリの1つだろう。これにAI機能を搭載することで、予測・提案の精度を向上したり、親しみやすいユーザー体験を提供したりできる。例えば、Cleo AI（本社：米国）のアプリ「Cleo（クレオ）」では、2025年8月提供開始の最新版（Cleo 3.0）で大規模言語モデル「OpenAI o3」を採用している。最近の取引履歴をもとに推論を行い、ユーザーが質問しないときでも、情報を能動的に提示する。また、ユーザーがアプリにチャットした内容から、予算目標や経済的なストレス要因などを記憶することで、親しみやすくパーソナライズされたやり取りを行う（図表）。個々の機能は、技術的に高度なブレイクスルーではないが、それらをユーザー視点で統合することで、アプリが「相談しやすいファイナンシャルアドバイザー」の役割を果たしている。Cleo AIは、世界最大級のフィンテックイベント「Money20/20」の第1回マネーアワード（25年10月）で銀行業務部門グランプリを受賞した。

ウェアラブルデバイスの 金融サービスへの活用

ウェアラブルデバイスが金融サービスと融合することで、非接触決済やデータ連携を通じた「シームレスな

図表 パーソナライズされた金融アドバイス提供のための金融エージェントのモデル



出所：Cleo AI 社公表資料 (<https://web.meetcleo.com/blog/introducing-cleo-3-0>) を基に日本総研作成

決済体験」を加速させている。利便性とセキュリティを両立させたこの新たな潮流は、次世代の金融インフラとして注目されている。クレジットカードのタッチ決済に採用されている NFC TYPE-A IC チップを組み込んだ指輪型端末（スマートリング）は、日常の決済動作を簡略化できる。EVERING（本社：東京都）の「EVERING」は、表示画面はないものの、充電不要という手軽さが利点だ。

また、ウェアラブルデバイスから得られる行動データを金融サービスに活用する動きもある。生体情報を高精度に取得できれば、生命保険や自動車保険といった分野におけるリスク算出の精緻化につなげることができる。Kort Valuta（本社：東京都）が開発したスマートリング「TwoCa Ring」は、VISA タッチ機能に加えて、心拍数・体温・睡眠時間を測る機能を持つ。

これらの生体情報は、ユーザーの同意を前提として、さまざまなサービスに連携して活用される。

日本の既存技術が量子コンピューターに搭載

26年3月に閣議決定した「第7期科学技術・イノベーション基本計画」では、量子コンピューティング技術が国家戦略技術領域として位置づけられており、金融商品のポートフォリオ最適化は量子コンピューター

ターの有望な用途の1つである。国内外を問わず数多くのスタートアップが量子コンピューターの開発を進めているが、ここではその完成品ではなく、部品メーカーの動きに注目したい。

量子コンピューターにはいくつかの方式があり、そのうち、中性原子方式やイオントラップ方式は演算の多くの工程をレーザー光によって制御する。原子の種類・工程ごとに異なる波長・性能を持つ光源が必要となるが、中性原子方式で用いる紫外レーザー光源には、オキサイド（本社：山梨県）などが半導体ウェハー検査装置用レーザーで培った技術が応用されている。

量子コンピューターは、QPU（量子演算装置）といった心臓部だけでなく、極低温環境の維持や微弱信号の制御などを行う膨大な周辺機器の集合体である。これらの周辺機器は日本製の部品・材料が多く使われているため、日本のスタートアップによる参入も期待される。X

Profile

金子 雄介

(かねこ ゆうすけ)

2005年日本総研入社。07年から新技術のR&Dおよび導入に従事。SMFG ITイノベーション推進部兼務などを経て、現在はブロックチェーンなどの技術領域、ならびに先進技術の社会影響に関する研究に従事。

